

研究ノート Research Note

インド北東地方の生態環境と多民族社会

— アッサム州ブラマプトラ川渓谷の事例より —

浅田晴久*

要旨: 本稿はインド北東地方、アッサム州ブラマプトラ川渓谷低地部における多民族社会の存立要因について、地域固有の生態環境とそれを基盤とした生業活動の観点から明らかにすることを目的とする。マイクロレベルの生態環境と対応させるために、既存研究で利用されてきた県・郡単位の統計データではなく、村落レベルのセンサスデータと現地の聞き取り調査を組み合わせて民族別の村落分布状況を調べた。その結果、調査対象としたブラマプトラ川渓谷東部のロキンプル県では生態環境の差異に応じて各民族がゆるやかに住み分けていることが判明した。各民族が居住する村落周辺の生態環境の差異は村落構造のみならず生業活動にも影響を与えている。アホムとミシン、スティヤという異なる民族の村落での観察により、生業活動の季節差、必要労働力の差、土地利用の差を利用する形で、人・家畜の往来、労働サービスの提供が村落間で生じていることが分かった。従来のアッサム州社会の研究では各民族の固有文化や社会慣習、宗教などが注目されていたが、新たに生態環境を基に地域を捉え直す視点を導入することで多民族社会の存立要因を明らかにし、現代的な課題の解決に貢献できる可能性があると思われる。

キーワード: アッサム州、氾濫原、民族、生態区、村落センサス

I. はじめに

1. 研究の背景と目的

インド北東地方は東南アジア、チベット(中国チベット自治区)に近接している地理的条件もあり、北インドの主要民族であるインド・ヨーロッパ系にくわえて、チベット・ビルマ系やタイ系など非アリア系の民族も多数暮らすユニークな多民族社会を形成してきた(図1)。各州の指定トライブ(Scheduled Tribe; ST)、指定カースト(Scheduled Caste; SC)の比率から、インド北東地方が他地方とは異なる特異な人口構成を有していることがうかがえる(表1)。北東地方7州(アルナーチャル・プラデーシュ州、アッサム州、メガラヤ州、マニプル州、ミゾラム州、ナガランド州、トリプラ州)の中で最大の人口規模を誇り政治・経済の中心的位置を占めているのがアッサム州である。アッサム州では肥沃な土地を求めて各方面から様々な民族が移住してきた歴史的経緯があり、言語や習慣が異なる多民族から構成される社会が現在までに形成されてきた。このアッサム州の多民族社会がいかに存立してきたか、その背景をローカルな生態環境に基づいた生業活動の側面から探るのが本稿の目的である。

多数の民族が暮らしているインド北東地方では、州



第1図 対象地域

注: 標高300m以上の地域に色をつけてある。

第1表 インド北東地方7州の人口、指定カースト、指定トライブ比率

	面積 (km ²)	人口 (1000人)	人口密度 (人/km ²)	指定カースト 比率(%)	指定トライブ 比率(%)
アルナーチャル・プラデーシュ州	83,734	1,383	17	0.6	64.2
アッサム州	78,550	31,169	397	6.9	12.4
メガラヤ州	22,720	2,964	130	0.5	85.9
マニプル州	22,347	2,722	122	2.8	34.2
ミゾラム州	21,081	1,091	52	nil	94.5
ナガランド州	16,579	1,980	119	nil	89.1
トリプラ州	10,492	3,671	350	17.4	31.1
インド	3,287,263	1,210,193	368	16.2	8.2

注: 総人口については2011年度データ使用。それ以外は2001年度データ。

資料: 2001年度センサス, 2011年度センサスより作成。

* 奈良女子大学文学部

によってその居住パターンの特性は異なっている。アルナーチャル・プラデーシュ州、メガラヤ州、ナガランド州のような山岳州では、その険しい地形が障害となって人々の移動が制限されるために、各民族の居住域は概して分水嶺を境に隔たれていることが多い（浅田，2007）。アッサム州においても州内の山地部では民族の自治県が認められるなど比較的明瞭な居住域を形成していることもあるが、州の大部分を占めるブラマプトラ川渓谷の低地部では古くからの往来がさかんであったために、民族間の接触が必然的に増加し、各民族の居住域も不明瞭になっている。隣国のバングラデシュまで連続するこの往来容易な地形条件はアッサム州内の民族間衝突の一因にもなってきた。

近年のアッサム州の社会を語る上で避けて通れないのが、外国人移民の排斥運動と、暴力をとまなう民族自治権の拡大運動である。アッサム州では1947年の印パ分離独立以前より、自発的・強制的の如何に関わらず、州外に出自を持つ移民が多数暮らしていたが（井上，2003; Baruah, 2011）、特に1971年のバングラデシュ独立以降、アッサム州に大量に流入してきたベンガル移民に対する排斥運動が高まりをみせた。その運動は1979年から1985年までアッサム州全体に反外国人運動が拡大する事態にまで発展することになる。さらに1980年代からは州内の在来民族により結成された武装団体¹⁾が各民族の自治権拡大を要求する活動を各地で活発化させたりもした。このような不安定な社会状況は、外部の研究者の立ち入りを制限し、現在までアッサム州を含むインド北東地方の地域研究の遅れを招く結果にもつながっている。

このような状況下でアッサム州の多民族社会に関する研究は、主として暴力をとまなう衝突や紛争に焦点を当てて分析が行われてきた（Phukon, 2000; Baruah and Rajkhowa, 2010）。その分析視角は政治や歴史的背景に着目したものから文学、宗教を扱ったものまで幅広いものがある。日本人研究者によるアッサム州社会に関する仕事も社会学や政治学の分野を中心に進められてきた。とりわけ在来住民とベンガル移民との衝突事件に関しては一定の研究蓄積があり（Kimura, 2001; 木村, 2007; 木村, 2012）、他にも自治県を獲得したボド族や丘陵地民族の社会運動の事例に関する研究も発表されている（井上, 2009; Kimura, 2013）。

これら既存研究では、土地をめぐる衝突や権利拡大を要求する運動など政治的な文脈からアッサム州の多民族社会が語られてきた。確かに民族間対立や暴力は今日のアッサム州社会が抱える根深い問題ではあるが、一方では20世紀後半から表面化してきた社会の

一側面に過ぎず、アッサム州社会の全てを説明するものではない。実際には政治や暴力からは距離を置いて日常生活を営んでいる住民が大多数であり、主として農村部に暮らす住民の日々の生業活動がアッサム州の社会を今日まで持続させてきたとも考えられる。アッサム州では多数の住民が土地や水といった生態資源に依存した生業活動に従事しており、前述の民族間の衝突の背景にも森林地、河川地域、共有放牧地などの土地問題があったとも指摘されている（木村, 2012）。

アッサム州の多民族社会を理解するためには非日常的な民族衝突の問題だけでなく、日常としての生業活動を通して民族間の関係性を明らかにする必要があると思われる。しかしアッサム州内の各民族について生業活動の差異に着目した研究はほとんどみられず、固有の文化や社会構造を記録した人類学分野の研究結果が散見されるばかりである（Nath, 2003; Gogoi, 2006; Choudhury, 2007）。地域の広がりを意識した民族間の関係性については、二次資料を用いて指定トライブの分布や人口変動を県レベルで分析する地理学的研究が行われているが（Kar and Sharma, 1997）、統計資料の制約で各民族は一律に指定トライブとして扱われるために具体的な民族間の関係を明らかにするには至っていない。

そこで本稿ではアッサム州の多民族社会の存立背景を考察するために、ローカルな生態環境の上に成立する生業活動の観点から分析を進める。従来の研究で用いられてきた県や郡というスケールの二次資料では、県内や郡内に複数の生態区が含まれるために生態的要因からの考察は不適であったが、本稿では利用できる最小単位である村落（行政村）レベルのデータを使用し現地調査の結果と合わせて議論を進めていく。

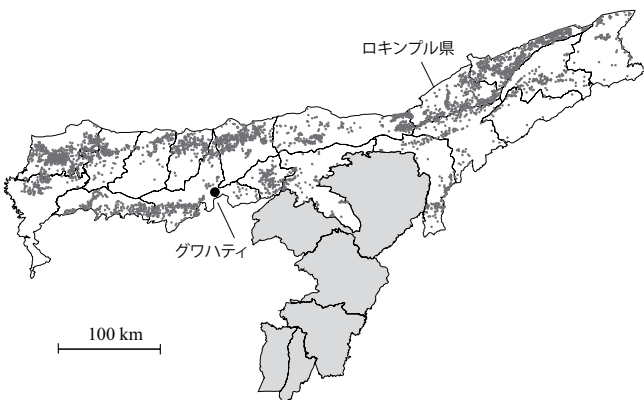
2. 研究方法

多くの既存研究で用いられているアッサム州政府発表の農業統計や経済統計は、県（district）単位か、郡（sub-division）単位でしかデータが集計されないため、ミクロレベルの解析には不向きである。一方で10年毎に実施される国勢調査（センサス）では村落単位の基礎情報まで集計・公表されるため、ローカルな生態環境との関連を論じることが可能となっている。2001年センサスの村落要覧（Village Directory）では1県分の情報が1つのデジタルデータ（エクセル形式ファイル）に収められており、アッサム州のグワハティにあるセンサス局で全県の情報を一括購入して利用することにした。

各ファイルには州・県・郡・区・村の各コードに続

いて、村落名、面積、世帯数、人口（指定トライブ人口、指定カースト人口を含む）、施設数、一次産品、収入、支出、土地利用などのデータが行政村レベルで含まれている。しかし各村落の緯度経度の情報が欠落しているために、単独では地図上で正確に表現することは不可能である。センサス局からは村落要覧に対応する形で、村落コードと村落界が表された行政アトラス（Administrative Atlas）も出版されているが、紙に印刷されたこの地図は必ずしも地理情報が正確とは言えず、デジタル化してコンピューターに取り込んでもGIS解析に利用するためには無視できない誤差が生じる（佐藤ほか、1997）。

そこで本稿では各村落の位置情報を取得するために現代インド地域研究東京大学拠点でWeb上で公開しているIndia Place Finder (<http://india.csis.u-tokyo.ac.jp/>)を利用した。このシステムは2001年センサスに記載されている行政村名を基に検索すると、その村落の緯度経度が取得できるというものである。



第2図 ブラマプトラ川渓谷内の指定トライブの分布

注1：ST人口比率が全人口の50パーセントを越える村落を表示。
 注2：ブラマプトラ川渓谷外にある県はグレーで表示してある。
 資料：2001年度センサス村落要覧より作成。

図2は村落要覧を用いて、ブラマプトラ川渓谷内の18県を対象に指定トライブが村内人口の過半数を占める村落を地図上にプロットしたものである。指定トライブの居住村は各県で一様に分布しているわけではなく、県単位の統計では表現しきれない有意な偏りがあるのは明らかである。この図からはブラマプトラ川渓谷の東部と西部で指定トライブの居住村の分布傾向が異なることも読み取れる。

センサスから得られる情報では各村落の指定トライブ人口は判明しても、実際の民族構成までは分からない。そこで村落の住民情報を取得するために、著者が2007年より継続してフィールドワークを行っている

ブラマプトラ川渓谷東部のロキンプル県を対象を絞り、2008年から2012年まで断続的に県内各地で聞き取り調査を実施した。調査方法は、複数の村人の面前で近隣の村落の名称とおおよその位置を告げて、これらの情報を基に村人たちに各村落の主要住民のカーストないしは民族構成を回答してもらうというものである²⁾。同様の聞き取り調査を県内の複数箇所において繰り返し実施することで、広域の住民情報を取得することができた³⁾。

II. 対象地域の概要

1. ブラマプトラ川渓谷の生態構造

ブラマプトラ川渓谷とは、チベット高原南西部に端を発したブラマプトラ川が東進した後にヒマラヤ山脈を越えてアッサム州東端の低地に入る地点から、アッサム州西端で南へとその流路を変えてバングラデシュに入る地点までの、長さ約700 km、幅平均約80 kmの区間のことを指す（図1）。その北側にはブータンからアルナーチャル・プラデーシュ州にかけて標高4,000 m級の東部ヒマラヤ山脈が、南側にはメガラヤ州の丘陵、アッサム州のカルビ・バレイル丘陵、ナガランド州の山地など標高2,000 m近い丘陵が連なっている。

ブラマプトラ川渓谷内は標高100m以下の低平な土地が広がっており、中央を流れる本流からの距離に応じて、内側から外側へと、氾濫原、自然堤防帯、山麓扇状地の3つの地形ユニットに大別される（Bhagabati and Das, 1992; Bhagabati et al., 2001）。ここで氾濫源とは主にブラマプトラ川本流の季節的氾濫によって形成された地形で、中州や沼沢地も含めて一つの地形ユニットを成している。自然堤防帯は本流および南北から注ぎ込む支流により運ばれて来た河川堆積物によって形成されており、アッサム州の膨大な人口を扶養する農業生産の中心地となっている。山麓扇状地は第三紀の地質から成り、早くから森林保護区や茶園として利用されてきた地域である。

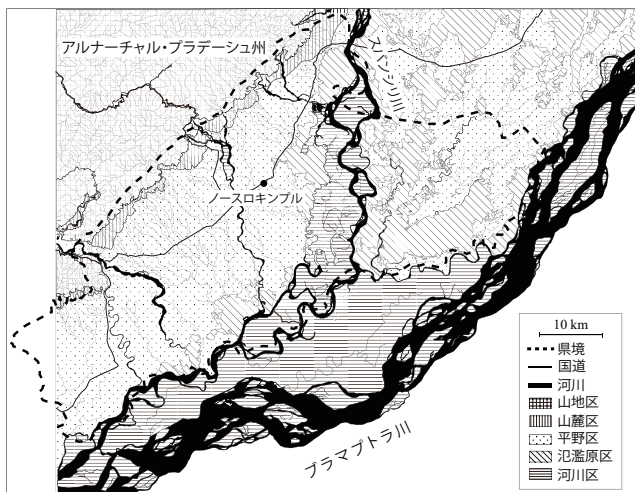
ブラマプトラ川渓谷の気候は湿潤モンスーン気候に属し、4月と5月のプレモンスーン期、6月から9月までのモンスーン期、10月から3月までの乾季に分けられる（Bhagabati et al., 2001）。年間降水量はメガラヤ丘陵の雨陰にあたる渓谷西部で2,000 mmと少なく、東部では3,000 mm以上になる。東部でもヒマラヤ山脈の前面にあたるブラマプトラ川北岸部では4,000 mmに達する地域もある。

ブラマプトラ川渓谷内部は地形や気候の地域差が大きく、マクロレベルでは一括して氾濫原地形、湿潤モ

ンスーン気候と表現される生態環境でも、ミクロレベルでみると必ずしも一様ではない。以下、本稿では生態環境から各民族の居住パターンを考察するために、生態区概念を用いて分析を進める。生態区とは地形・水文・土壌・植生といった自然環境だけでなく、土地利用や生業活動をも加味した地域区分である（高谷，1985）。

2. ロキンプル県の概要

本稿で対象とするロキンプル県はブラマプトラ川渓谷の東部に位置し、南をブラマプトラ川に、北をアルナーチャル・プラデーシュ州の丘陵地に挟まれた北岸部にある。2,277 km²の面積に、104万人（2011年）の人口が暮らしている。ブラマプトラ川の支流で県の中央を流れるスパンシリ川によって、東のドクアカナ郡と西のノースロキンプル郡の2地域に分断されている。



第3図 ロキンプル県周辺の生態区分図

資料：5万分の1地形図より作成。

ロキンプル県の生態地域区分は地形図を用いて試みた。使用したのはインド測量局（Survey of India）発行の5万分の1地形図で、ロキンプル県をほぼ全域にわたってカバーする11枚の図幅である⁴⁾。地形図上に記載された情報を基にして対象地域を山地区、山麓区、平野区、氾濫原区、河川区の5つの生態区に分類した（図3）。山地区はほぼアルナーチャル・プラデーシュ州の丘陵地に相当する標高約300 m以上の地域である。山麓区は山地区と平野区に挟まれた急傾斜の地域である。平野区は標高100 m以下で傾斜が緩く、中小河川により形成された自然堤防が発達している。氾濫原区は平野区と河川区とに挟まれ、雨季になると大部分の土地が水没する地域である。河川区は

ブラマプトラ川の本流とその主要な支流、および河道内部の中州から成る。

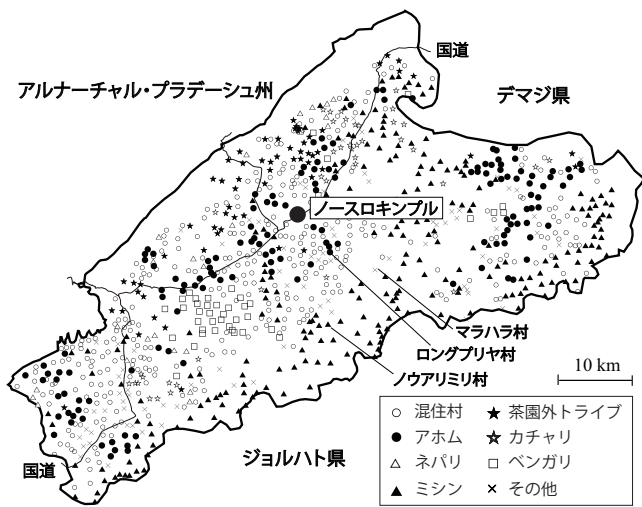
県庁所在地であるノースロキンプルは人口10.5万人（2011年）で、平野区に立地している。ブラマプトラ川渓谷では北岸と南岸の自然堤防帯に国道が通っており、アッサム州の主要な都市は国道沿いに立地している。それらの多くは茶産業の振興や森林資源の開発のために英領期に建設されたもので、その歴史は比較的新しい（Bhagabati et al., 2001）。現在もアッサム州の都市人口は全人口の14%（2011年）に過ぎず、インド平均の31%（2011年）よりはるかに少ない。人口96万人（2011年）のグワハティ以外は、都市といっても街に近い性質を有している。

ノースロキンプルも英領期からアルナーチャル・プラデーシュ州への玄関口として現在の国道沿いに発達し、バススタンドや鉄道駅、空港が建設されてきた。市内には大学、病院、裁判所など公的機関の他、主要銀行の支店や商店などが建ち並んでいる。住民は県内だけでなく県外から移住してきた人も多く、その出自も多様であるために、各民族の居住環境を調べる本稿では対象外とする。

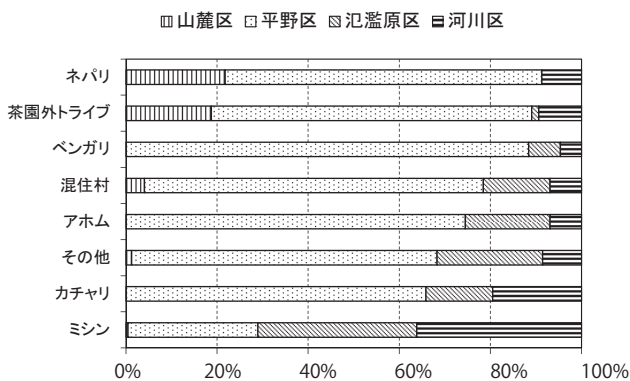
ロキンプル県の民族構成はその言語系統から、インド・ヨーロッパ語族、チベット・ビルマ語族、タイ語族、オーストロアジア語族の4つに大別される⁵⁾。インド・ヨーロッパ語族にはヒンドゥー教徒のオホミヤ、ベンガル移民（ベンガリ）、ネパール移民（ネパリ）が含まれる。このうちオホミヤは早くから県内に居住していたが、ベンガリは主として農耕に従事するため（Baruah, 2011）、ネパリは牧畜や茶園労働に従事するために（Nath, 2003）、ともに19世紀半ば以降に県内に移住してきた。チベット・ビルマ語族にはミシン、カチャリ、デオリなどが含まれる。ミシンはかつてアルナーチャル・プラデーシュ州の丘陵地に住んでいたが、13世紀頃から断続的にアッサム州の低地に移住したと考えられている（Mipun, 1987）。チベット・ビルマ語族の各民族の祖先は紀元前後に北方のチベットから移住してきたとされているが、不明な点も多い（Gopalkrishnan, 2000）。タイ語族にはアホムとカムティが含まれる。アホムは13世紀に、カムティは18世紀末にともにミャンマー北部からパトカイ山脈を越えてブラマプトラ川渓谷に移住してきた。オーストロアジア語族にはサントルやムンダが含まれる。彼らは19世紀半ば以降に茶園労働者として現在の西ベンガル州、ビハール州、ジャールカンド州から連れてこられた。現在自分たちの村落を形成している者は茶園外トライブ（Ex-Tea labor tribe）と呼ばれている。

Ⅲ. 村落立地と生態区

ロキンプル県内の複数箇所における聞き取り調査により、県内の全 1170 村のうち 981 村（約 84%）について住民構成を知ることができた。民族毎の村落数を集計した結果、最も多いのは複数のカースト、民族が入り混じった混住型で 348 村、次にミシンが 235 村、アホムが 145 村、茶園外トライブが 64 村、ベンガリが 43 村、カチャリが 41 村、ネパリが 23 村である。村落数がそれ未満の民族、カーストの住む村はすべて「その他」村落として本稿では扱う。聞き取り調査から住民構成が明らかにできなかった 189 の村落については解析の対象外とする。



第4図 ロキンプル県内の民族別村落分布
資料：2001 年度センサス村落要覧，現地調査より作成。



第5図 各民族の村落立地場所
資料：図3，図4と同じ。

ロキンプル県内の村落の位置を民族別に分類して地図上にプロットしたところ、図4のようになる。この図から各民族の村落は必ずしも無秩序に立地しているわけではなく、民族毎の居住域は特定の地域に偏っていることが分かる。最も多い混住型の村落はノース

キンプル付近に多くみられる。アホム村落は県を東西に走る国道沿いに多く立地している。茶園外トライブの村落は国道の北側の地域に多くみられる。このように各民族の居住範囲には一定の傾向がみられる。

村落立地傾向をより詳しく調べるために、各生態区に含まれる村落の比率を GIS 上で計算し、民族毎に集計した結果が図5である。いずれの民族でも平野区内に立地する村落の比率が高くなっているものの、民族毎の村落立地の特徴には確かな違いが認められる。つまり他民族の村落と比べてネパリや茶園外トライブの村落は山麓区に立地する割合が大きく、カチャリやミシンの村落は氾濫原区および河川区に立地する比率が高くなっている。一方でベンガリやアホムについては、山麓区や氾濫原区に立地する村落は少なく、中間の平野区にほとんどの村落が立地している。

このように生態環境を基準にして考えると、ロキンプル県内に住む民族はアルナーチャル・プラデーシュ州の丘陵地寄りの地域に暮らす民族から、ブラマプトラ川と支流のスバンシリ川の近傍に地域に暮らす民族へと順序付けをすることができる。

それでは居住地の生態環境の差は、各民族の暮らしにどのような形で表れるのだろうか。そこで村落要覧を利用して民族毎の平均的な村落構造をいくつかの指標に基づいて算出した（表2）。その結果、丘陵地寄りに住む民族と、河川寄りに住む民族では、村落構造が大きく異なることが明らかになった。表2の左側、丘陵地寄りに住む民族（ネパリ、茶園外トライブ）の村の特徴として、1）面積が大きい、2）世帯数が多い、3）世帯当たりの構成人数が少ない、4）都市⁶⁾に近い、5）電化率が高い、6）収入と支出が多い、7）世帯当たりの耕地面積が小さい、8）耕作可能余剰地が少ない、9）灌漑が全く利用できない、などが挙げられる。一方で表2の右側、河川寄りに住む民族（カチャリ、ミシン）の村は、1）面積が小さい、2）世帯数が少ない、3）世帯当たりの構成人数が多い、4）収入と支出が少ない、5）世帯当たりの耕地面積が大きい、と反対の特徴がみられる。丘陵と河川の間の中間の平野区に住む民族（混住村、アホム）の村落では両者の中間の特徴がみられる。このうち村落面積、耕作可能余剰地、灌漑の有無は村落周辺の生態環境が少なからず影響していると思われる。一方で村内の世帯数や世帯当たりの家族数は各民族の社会構造に大きく依存すると思われる。世帯当たりの耕地面積は、生態環境と社会構造の両方の条件が合わさった結果であると考えられる。さらに民族毎の居住地の生態環境、村落構造の違いだけでなく、次章で述べると

第2表 各民族の村落構造を示す指標

民族	ネバリ	茶園外トライブ	ベンガリ	混住村	アホム	その他	カチャリ	ミシン
村落数	23	64	43	348	145	82	41	235
面積 (ha)	188	180	224	183	163	193	137	163
世帯数	147	152	244	135	125	134	99	92
世帯当たり構成人数	5.36	5.21	5.98	5.50	5.46	5.94	5.90	6.92
最寄都市からの距離 (km)	15.3	15.8	16.2	17.4	22.4	20.9	14.9	25.4
電化率 (%)	69.6	82.8	81.4	72.7	61.4	59.8	61.0	20.9
収入(100 Rs.)	116	116	166	40	46	60	29	28
支出(100 Rs.)	87	107	142	34	40	52	27	26
総耕作地面積 (ha)	144	138	166	137	116	144	109	107
世帯当たり耕作地面積 (ha)	0.97	0.91	0.68	1.02	0.93	1.07	1.11	1.16
耕作可能荒地 (ha)	17.3	16.3	24.5	18.3	20.7	25.2	14.6	28.7
河川からの灌漑率 (%)	0.0	0.2	0.0	2.6	0.1	2.4	1.0	3.2
その他の灌漑率 (%)	0.2	0.0	0.0	0.6	0.7	1.2	0.0	0.2

資料：2001年度センサス村落要覧，現地調査より作成。

おり生業活動にも民族間で差異がみられることが筆者の観察から明らかになってきた。

IV. 生業活動と民族間の交流

1. 生業活動

本章ではロキンプル県内に暮らす民族の中からタイ語族のアホムとチベット・ビルマ語族のミシン、スティヤをとりあげて、各村落で観察された生業活動と、両民族間でみられる交流事例を報告する。アホムとミシンの事例はそれぞれ主として県内のロングプリア村、ノウアリミリ村での観察に基づいている(図4)⁷⁾。ロングプリア村は平野区に位置し、ノースロキンプルからの距離は約10 km、総世帯数は約100戸である。ノウアリミリ村は河川区に相当するスパンシリ川の中州上にあり、ノースロキンプルからの距離は約20 km、総世帯数は約400戸である。スティヤの事例は河川区に相当するスパンシリ川の中州上に立地しているマラハラ村での観察に基づいている。マラハラ村はノースロキンプルからの距離が約16 kmで、総世帯数は約50戸である。

図5から明らかのように、アホムの村落の多くは自然堤防が卓越する平野区に立地している。ロングプリア村でも自然堤防上に線型に屋敷地が形成され、後背湿地の低みは水田として利用されている(浅田, 2011)。比較的ノースロキンプルに近い場所に村落を構えているため、現在では自転車やバイク、乗り合いタクシーなどで日中働きに出る村人も少なくないが、村内世帯の過半数は専業農家である。

農業を営むアホムにとって、最も重要な作物は稲である。アッサム州で栽培される稲は移植栽培のハリ稲と直播栽培のアフ稲、バオ稲の2系統に大別される(浅田, 2011)。ハリ稲は苗代で育てられた後、5月下旬の雨季入り後に本田に移植される。アフ稲とバオ稲

はともに3月に本田に種籾が直播されるが、アフ稲は雨季入り直後の6月に、バオ稲は雨季終了後の11月に収穫されるという違いがある。アッサム州では管井戸や揚水ポンプといった灌漑はほとんど用いられず、雨季の天水に依存した稲作が行われている。

アホム村落ではハリ稲が圧倒的な栽培面積を占めている。1年のうち、苗代から本田への移植作業が行われる雨季入りの5月下旬から8月上旬、収穫作業が行われる雨季明けの10月下旬から12月上旬が農繁期になる(写真1)。乾季にあたる12月から4月までは、田では牛が放牧されるのみで作物は栽培されず、屋敷地の一面に設けられた菜園でジャガイモやキャベツなど換金用の野菜類が栽培される(写真2)。この時期は降雨が期待できないため、屋敷地内の掘り抜き井戸からバケツで汲んで水やりが行われる。乾季は稲作のための作業量が少なく、1年の中では農閑期にあたる。

ミシンの村落はアホム村落とは大きく景観が異なる。



写真1 ハリ稲の移植作業
著者撮影



写真2 屋敷地内の畑におけるジャガイモ栽培
著者撮影



写真4 カラシナの脱穀作業
著者撮影

る。川の中州上に立地しているノウアリミリ村では、河岸沿いの比高が高い土地に高床式の屋敷が密集しており、河岸から離れた比高の低い土地が耕地として利用される。河川水位が上昇する雨季には低位の耕地は完全に湛水し、高位の屋敷地の一部まで湛水することもある。

ミシン村落でもアホム村落と同様に、主要作物として稲が栽培されている。しかし雨季入り直後から河川の増水により1m以上湛水する耕地では移植作業が不可能になるため、移植稲の栽培は行われず、もっぱら直播稲が栽培されている。直播稲のなかで、アフ稲は乾季の1月から耕起作業が始められ、3月に乾田に播種された後、雨季が本格化する6月末までに収穫される（写真3）。もう1つの直播稲であるバオ稲はいわゆる浮稲であり、3月に耕地に播種された後、雨季の間は全く作業がなく、雨季が終了して湛水が引いた



写真3 アフ稲の収穫作業
著者撮影

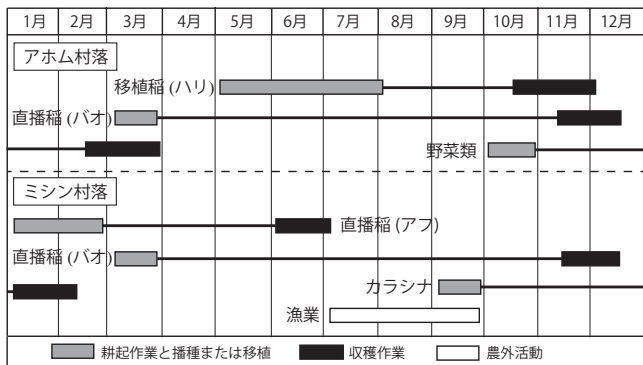
後の11月に収穫される。労力のかかる移植作業がない分、アホムの村落に比べて雨季の作業量は少ないと言える。

一方で乾季には稲が収穫された後の田でカラシナ、ケツルアズキなどが栽培される（写真4）。カラシナを栽培するために稲収穫直後から耕起作業が始まり、1月に収穫した後はすぐに脱穀作業が行われる。その後再びアフ稲栽培のための耕起作業が雨季入り前まで続けられる。このようにミシン村落ではアホム村落と比べて乾季の作業量が相対的に多いと言える。世帯当たりの耕地面積が大きい点、労働投入量の少ない粗放的な農業が営まれる点もアホム村落と大きく異なっている。

アホム村落とミシン村落で観察された生業活動の年間サイクルは図6にまとめられる。筆者が観察した2つの村落は直線距離にして約10kmしか離れていないが、平野区と河川区という異なる生態区に属しているために季節毎の生業活動が全く異なったものになっている。このような立地環境と生業活動の違いは、両村落の間に農繁期、土地利用、収入などの差を生みだし、この差異こそが異民族間の交流を可能にしていると考えられる。

2. 民族間の交流

交流事例の1つめとして、アホム村落におけるミシン女性の農業労働について紹介する。前述のとおりアホム村落の生業で最も重要な位置を占めるのが雨季の移植稲栽培であるが、近年は安定的な収入を志向して村外に定職を求める村人が多く、村内での農業労働力の不足が恒常的な問題となっている。たとえば最も労力を必要とする苗代から本田への移植作業は通常女性



第6図 アホム村落とミシン村落における生業カレンダー

資料：現地調査より作成。



写真5 農作業の手伝いをするミシン女性

著者撮影

2人から8人程度の集団で行われ、これには近所の女性にあらかじめ移植作業日を告知して手伝いを依頼しておく必要がある。苗代で育てられた苗の移植日が遅くなると収量の低下を招くため、移植適期を逃さず、すみやかに移植作業を行うことが重要である。しかし村の若い女性の中には都市まで働きに出かける者や学校に通う者が増えており、必要な労働力を村内で確保することは年々難しくなっている。労働力の不足は主に女性の仕事とされる移植作業や収穫作業で顕著になっている。男性の村人も村外に働きに出かける者が年々増えているが、従来男性の仕事とされてきた牛を用いた耕起作業は徐々にトラクターに置き換えられつつある。

村内で労働力を確保できない場合は、村外の知人や親類に依頼して手伝いに来てもらうしかない。アホムの村人の中には、ミシンの女性を移植や収穫といった農作業に雇う者が少数ではあるがみられる。前述のとおり、ミシンの村落では河川の増水により耕地が長期間湛水するため雨季は農作業の量が相対的に少なく、農閑期にあたる。また都市から遠方に位置するミシン村落では、農外収入の機会はより少なく、教育費や生活費が上昇する中で村人は現金収入を必要としている。農業労働力を確保したいアホムと現金収入の機会を求めているミシン、両者の思惑が合致した結果、ミシン村落からアホム村落への出稼ぎ労働が実現されているのである⁸⁾。

アホムの村人に呼ばれてやって来たミシン女性⁹⁾は、移植作業や収穫作業の期間中、短いときは数日間、長いときは数週間、アホム村落に滞在して連日農作業の手伝いを行う(写真5)。受入先世帯の空き部屋で寝泊まりし、自らの炊事は家主とは別に屋外で行う。農作業が全て終了すると、賃金を受け取り村に帰るが、通常は翌年も再び呼ばれることになる。このようにし

て個人的な絆が強まり、農作業の手伝いだけでなく、就職や進学相談事をするなど民族の垣根を越えた関係性が深められていく。

2つめの交流事例は、家畜を介した関係である。家畜は使役動物、副産物の利用、成長させて売却益を得る家財として村人の生業の中に組み込まれている。中でも牛は犁やまぐわを牽引させる耕起作業、また休閑期に田に放牧して地力を回復させるなど、稲作にとって欠かせない要素である(浅田, 2011)。アホムの村落では去勢された役牛、乳牛、仔牛など合わせて一世帯当たり4頭から8頭程度の牛が所有されている。

アホムの村落で牛を多数飼っている村人にとって、悩ましい問題は牛を世話する場所と飼料の確保である。この問題は雨季にますます深刻になる。雨季の間は田では稲が栽培されるため、村内で牛を放し飼いできる場所は自然堤防上にある狭い屋敷地内か道路上に限られる。前年の収穫後に保存しておいた稲藁のストックは日が経つごとに減少し、道路脇に自生している雑草の量も限られている。牛の飼料を確保するために、夏場に毎日スバンシリ川の河畔にまで雑草を刈り取りに行く村人も多い。また村外に働きに出かける人が増えているために、日中牛の世話をする労力を確保できないという問題も出ている。

この問題の解決策として、筆者が調査をしたアホム村落の中には自家で所有している牛を、河川区に立地しているスティヤの村落¹⁰⁾に預ける者がみられた。自家で世話しきれない家畜を他の村人に一定期間預けるのはアッサム州の村落では一般的にみられる制度である。しかし河川区の村落では前述のとおり、耕作可能余剰地が広く、牛を放牧することができる土地が多数残されている。河岸沿いの土地には牛の飼料に適し



写真6 放牧地で牛の世話をするミシン少年
著者撮影

た雑草も豊富に覆い茂っている（写真6）。このように河川区は牛を飼育するのに好都合な環境であるために、アホムの村人が自家で世話しきれない牛、特にまだ年齢の若い仔牛を預けることが可能になっているのである。

スバンシリ川の中州にあるスティヤ村落に連れて来られた牛は、成長するまでの数年間、他の牛とともにここで飼育されることになる。雌の牛を預かった場合は、牛乳を販売して現金収入を得ることができる。スバンシリ川の河岸では仲介人がノースロキンプルから自転車で牛乳を買い付けに来る光景がみられる。預かっている雌牛が新たに仔牛を出産した場合は、1頭目の仔牛の所有権を得ることもできる。雄の牛を預かる場合は、自家で耕起作業を教え込んで農作業に利用することも可能である。成牛になるとやがて元のアホム村落に連れ戻されるが、そのまま預かり主へ所有権が売却されることも多い。

スティヤの村人のなかには、アホム村落から牛を預かる代わりに、自分の子供をアホムの家庭に一定期間預ける者がいる¹¹⁾。河川区の村落では河川水位が上昇する雨季に学校が休校になることが珍しくない。また交通の便が悪いために、村外から通勤する教師が学校に現れず休講になることも頻繁にある。村周辺には、大学以上の高等教育機関が立地していない。親たちは満足のいく教育を受けさせるために、アホムの村落にある学校、もしくはそこから都市に近い学校まで子供を通学させるのである¹²⁾。アホムの家庭に下宿するスティヤの少年は、受入先の家族と寝食をともにする代わりに、登校前や放課後は農作業や家畜の世話など下宿先の仕事の手伝いをする義務を負う。預けられた少年は学校を卒業するまでの期間、アホムの家庭に滞

在することになるが、慣れない環境に適応できず短期間で自分の村に戻ってしまうケースもみられた。

以上、著者の観察記録に基づくアホム村落とミシン村落、ならびにスティヤ村落との間にみられる交流事例を紹介した。これらの事例は必ずしも民族間で一般的にみられるものではなく、個人的なつながりをきっかけとして生じるようになったものである。しかし民族間の関係性は固定されており、アホム村落の子供がミシン村落に預けられたり、スティヤ村落の家畜がアホム村落で飼育されたりという反対の事例は確認されなかった。このような関係性が形成される要因として、生態環境の差異および都市からの距離という地理的条件が挙げられる。調査を行ったロングプリア村とノウアリミリ村、マラハラ村はスバンシリ川を挟んでいずれも平野区、河川区の周縁部に位置しており、生態区

の中心に位置する村落に比べて、民族間の交流が起りやすい条件が備わっていたとも考えられる。概してアホムの村人の口から聞かれるミシン、スティヤに対する評判としては、いずれも「貧しい」、「汚い」といったネガティブなものが多い。指定ドライブのミシンは留保制度によって進学や就職の際に特別枠が認められているのに対し、アホムとスティヤは優遇措置の少ない「その他後進諸階級 (Other Backward Classes, OBC)」に位置づけられており、そういった点でも他民族への反感は少なからずあるようである。しかし多くの村人が村外に働きに出かけているアホム村落では、水田や家畜を維持するための労働力が恒常的に不足しており、他村落からの人手を必要としている。一方で都市から遠く離れた場所に住むミシンやスティヤの村人にとっても、農業賃労働の機会があり教育環境も良いアホム村落は自分たちの村落にはない魅力がある。互いの民族について心情的にはわだかまりがあるかもしれないが、経済的にはともに協力し合うことで互いに不足しているものを補完できる関係性が築かれている¹³⁾。

V. おわりに

本稿ではアッサム州のブラマプトラ川渓谷における多民族社会の存立要因について、村落要覧と地形図の解析、ならびにフィールドワークにより得られた情報を基にして各民族の居住村落分布図を作成することにより考察を行った。その結果、ブラマプトラ川渓谷内に住む各民族は無秩序に居住しているわけではなく、民族の間には氾濫原低地内の生態環境に応じたゆるやかな住み分けがみられることが明らかになった。各民族は居住地域のローカルな生態環境に応じて、異なる

生業活動を営んでおり、生業活動の季節差、必要労働力の差、土地利用の差を利用して、人、家畜、労働サービスなどを交換することで、異なる民族の共存が図られているのである。

アッサム州に暮らす諸民族について従来の研究では、政治的文脈からは各民族の社会運動や武力衝突など非日常的な場面が取り上げられ、人類学の調査では民族固有の文化や慣習が強調されるばかりで、地域内の日常的な民族間関係についてはほとんど研究されることがなかった。しかしベンガル移民と在来民族との衝突など今日的課題に対応するためには、メソスケールの空間を意識しつつ民族間の問題を扱うことが必要になってくる。その際に有効なのが、生態環境との関わりから地域の存立背景を考察する地理学的視点である。地域の生態環境に根ざした生業活動を考慮に入れることで、なぜアッサム州内でも民族間で良好な関係が保たれている地域と対立が生じている地域があるのか、どのようなときに良好な関係から対立へと変化するのか、理解できる可能性がある。

本稿では現在の村落立地と生態環境との関係に焦点を絞ったがために、住民がよその地域から移住して来て村落を設立した歴史的な経緯については全く触れなかった。なぜその場所に住んでいるのか、という根源的な問いを突き詰めていくためには、過去の移住時期とその経路に関する情報が必要不可欠である。その際には気候変化、森林面積変化、河道変化といった過去から現在に至る生態環境の変化についても同時に調べる必要がある。今後は過去の文献資料やセンサス資料、衛星画像等も利用して、生態環境の履歴とそれに対応した各民族の居住環境の変容過程を明らかにするという環境史的なアプローチが重要になってくるだろう。

付記 現地調査を行うに当たり、ガウハティ大学地理学教室の A. K. Bhagabati 先生、P. Bhattacharya 先生、ならびに調査村の方々には大変お世話になった。本稿の一部は科学研究費補助金・特別研究員奨励費「地域防災力の向上に向けた民族知の評価に関する研究—インド・アッサム州の事例から—」(研究代表者：浅田晴久、課題番号 11J00348) を使用した。本稿の骨子は 2012 年度日本地理学会秋季学術大会 (2012 年 10 月、於・神戸大学)、IGU 2013 Kyoto Regional Conference (2013 年 8 月、於・国立京都国際会館) にて発表した。

【注】

- 1) たとえばアッサム統一解放戦線 (United Liberation Front of Assam, ULFA)、ボドランド民族民主戦線 (National Democratic Front of Bodoland, NDFB) などがある。
- 2) 本稿では村人に認知されている民族名に基づいて村落を分

類している。オホミヤ、ベンガリ、ネパリなどは聞き取り調査した村人の認識に基づいた分類である。

- 3) ロキンブル県には 2 郡 (sub-division) の下に、全 7 つの revenue circle が置かれている。原則として各 revenue circle の村落に赴き、revenue circle 内の村落の民族情報について聞き取り調査した。
- 4) アッサム州では 1971 年以降 5 万分の 1 地形図が更新されていないため、本稿ではやむなくこの地形図を使用した。使用した村落要覧の情報とは年代に大きな隔たりがあり、この間に河道が変化するなど生態環境も一部変化しているが (Goswami et al., 1999)、地形図上の情報を生態区にまとめて集計することで、なるべく誤差が少なくなるように注意した。
- 5) ロキンブル県の民族のうち指定トライブはミシン、カチャリ、デオリだけである。
- 6) 村落要覧に記載されている県内の最寄都市はノースロキンブルをはじめすべて平野区に立地している。
- 7) ロングブリヤ村はすべての世帯がアホム、ノウアリミリ村はすべての世帯がミシンである。
- 8) ミシン村落からアホム村落への出稼ぎが始まったきっかけは洪水である。村人からの聞き取りでは、過去に洪水が発生した際にミシン村落では収穫前の稲が全滅し、賃金と米を得るために、洪水を免れたアホム村落へ大勢のミシンが稲刈りの手伝いに来たという。洪水後に他村へ出稼ぎ労働に赴く習慣はミシンに限らず、かつては調査地域周辺で広くみられたようだが、現在は他業種の日雇い労働の増加などで減ってきている。調査村落では現在 1 世帯のみである。
- 9) 筆者が観察したミシン女性は 40 代の既婚者である。彼女の夫は農業以外にビジネスの副業を持っているため、現在は生活に困窮しているわけではないが、アホムの村人との長年の付き合いもあり、毎年農作業の手伝いに来ている。写真 5 は彼女の娘が手伝いに来ていたときに撮影したもので、娘はしばらくの間アホム村落から学校に通っていた。
- 10) スティヤはチベット・ビルマ語族に属し、12 世紀にはアッサム州東部にスティヤ王国を築くほどの勢力を誇ったとされている (Sen, 2009)。聞き取り調査ではスティヤが主要住民という村落は県内で 18 村確認されたが、図 4、図 5、表 2 では「その他」村落に含めた。ミシンと同様スティヤの村落も河川区に立地している比率が相対的に高い。
- 11) アホムの村で下宿しているスティヤの子供は 2 世帯で確認したが、ともに男子であった。子供を預かっている 2 世帯は、いずれも農外収入があり、所有土地面積も大きく、経済的に余裕がある。1 世帯目の家長がノースロキンブルでマラハラ村出身者と知り合い、2006 年からマラハラ村に牛を預け、自家で子供を預かるようになった。2 世帯目ではこのアホム村人からの紹介で、後に自家で管理しきれなくなった牛をマラハラ村の別の住民に預けるようになり、その代わりに子供

を預かるようになった。

- 12) 調査地域周辺では親戚や知人の子供を預かって近くの学校に通わせる慣習が古くからある。本事例はこの慣習の中でも、村落間の生態環境の差を利用して家畜の移動も加わった特別な事例とみなすことができる。
- 13) 歴史的にもアホムとミシンの交流があったことが報告されている。19世紀初頭にアホム王国がビルマから武力侵攻を受けた際に、アホムが一時的にミシンの村に身を潜めたことがあり、それによりアホムの姓をミドルネームにもつミシンの集団が生まれているという (Mipun, 1987)。

【文献】

- 浅田晴久(2007): インド, アルナチャル・プラデシュ州に行く. 地理 52 (9), 102-110.
- 浅田晴久 (2011): タイ系民族アホムの稲作体系—インド, アッサム州の村落における事例研究—. 人文地理 63 (1), 42-59.
- 井上恭子 (2003): インド北東地方の紛争—多言語・多民族・辺境地域の苦悩—. 武内進一編: 『国家・暴力・政治—アジア・アフリカの紛争をめぐる—』アジア経済研究所, 43-78.
- 井上恭子 (2009): 憲法第6付則を通して見るインド北東地方—多民族地域における差別的保護政策の課題—. 近藤則夫編: 『インド民主主義体制のゆくえ—挑戦と変容』アジア経済研究所, 231-265.
- 木村真希子(2007): 反移民暴動における民衆のエージェンシー—近隣コミュニティにおける集合的暴力—. 国際政治 149, 111-126.
- 木村真希子 (2012): 社会運動と集合的暴力—アッサムの反外国人運動と「ネリーの虐殺」を事例に. 現代インド研究 2, 21-34.
- 佐藤崇徳・佐野広和・杉浦真一郎・岡橋秀典 (1997): GISを用いた海外地誌データの分析—インド・センサスデータの分析を例に—. 総合地誌研究叢書 30, 233-260.
- 高谷好一 (1985): 『東南アジアの自然と土地利用』勁草書房.
- Baruah, L. and Rajkhowa, A. (2010): *Peace, Conflict and North East India*. Purbanchal Prakash, Guwahati.
- Baruah, S. (2011): *Migration from East Bengal to Assam: Response, Reaction and Assimilation (1900-1947)*. Jagaran Sahitya Prakashan, Guwahati.
- Bhagabati, A. K., Bora, A. K. and Kar, B. K. (2001): *Geography of Assam*. Rajesh Publications, New Delhi.
- Bhagabati, A. K. and Das, M. M. (1992): *Agricultural Performance in Different Ecological Zones*. Mohammad, N. eds.: *The Ecology of Agricultural System, International Series in Geography, No.4*, Concept Publishing Company, New Delhi.
- Choudhury, S. (2007): *The Bodos: Emergence and Assertion of an ethnic minority*. Indian Institute of Advanced Study, Shimla.
- Gogoi, N. K. (2006): *Continuity and change among the Ahom*. Concept Publishing Company, New Delhi.
- Gopalkrishnan, R. (2000): *Assam: Land and People*. Omsons Publications, New Delhi.
- Goswami, U., Sarma, J. N. and Patgiri, A. D. (1999): River channel changes of the Subansiri in Assam, India. *Geomorphology* 30, 227-244.
- Kar, B. K. and Sharma, H. N. (1997): Socio-economic transformation in the tribal society of Assam. *Northeastern Geographer*, 28, 16-25.
- Kimura, M. (2001): Mass Media and Ethnic Group Formation: Comparative Analysis of Newspaper Reports on the Foreign Nationals Issue in Assam and West Bengal, 1979-1985. *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 13, 142-160.
- Kimura, M. (2013): Ethnic Conflict and Violence Against Internally Displaced Persons: A Case Study of the Bodoland Movement and Ethnic Clashes. *International Journal of South Asian Studies* 5, 113-129.
- Mipun, J. (1987): *The Mishings of Assam*. Gyan Publishing House, New Delhi.
- Nath, L. (2003): *The Nepalis in Assam: Ethnicity and cross border movements in the North-East*. Minerva Associates (Publications) Pvt. Ltd., Kolkata.
- Phukon, G. (2000): *Political Dynamics of North East India*. South Asian Publishers, New Delhi.
- Sen, S. (2009): *Tribes and Castes of Assam*. Gyan Publishing House, New Delhi.

(2013年11月28日受付)

(2014年2月7日受理)

Ecological Environment and Multi-ethnic Society in Northeast India: A Case Study in the Brahmaputra Valley in Assam

Haruhisa ASADA*

*Nara Women's University

Keywords: Assam, floodplain, ethnic group, ecological zone, village census

Northeast India surrounded by Bangladesh, Bhutan, China and Myanmar is the place of multi-ethnic society. In the plain area of the Brahmaputra valley in Assam, mixing of different ethnic groups founded the basis of present society and culture, but also often caused the conflict and social disorder. This study aims to discuss how these people have traditionally coexisted in the Brahmaputra valley from the viewpoint of ecological environment. The study area is Lakhimpur district in eastern Assam where many ethnic groups like Ahom, Mishing, Kachari, Khamti, and Bengali live in. Both primary and secondary data were collected to investigate the village location, village structure and livelihood pattern by ethnic groups. From the GIS analysis, it was found that people in the study area lived in different ecological zone by ethnic groups. Each group has the unique livelihood pattern based on local ecosystem. For instance, the Ahom living in plain zone and the Mishing and Chutiya living in river island zone grow different crops in the different season of a year. They can interact with each other by exchanging their livestock and labor services. The fluctuation of micro environment of the Brahmaputra floodplain may enable the coexistence of the different ethnic groups.